

『広島で考える平和
— 広島巡礼レポート06 —』

ヨハネ 片岡 義博

今年の広島も暑かった。——
八月五日・六日に原爆記念日にあ
わせて広島へ訪れました。

私が名古屋教区青少年委員会の
メンバーとして、この時期に広島
を訪れるのは今回で五度目で、今
回は二十名を越える教区の青年た
ちと共に広島を訪れました。

青少年委員会の広島巡礼は、夏
の恒例行事で、毎年広島教区主催
の平和公園から平和記念聖堂まで
平和を願い歌いながら祈りをこめ
て行進する「平和行進」や、各教
区の司教様の共同司式で盛大に行
われる「平和祈願ミサ」などの行
事に参加します。

今年は、ただ「恒例行事だから
広島へ行く」だけにならないよう
に、スタッフで広島巡礼のテーマ
等話し合いました。その際にあ
る紙面に目がとまりました。

それは、三つの「広島」「広島」
「ヒロシマ」という文字の使い分
けについて書いてありました。旧
字体の「広島」は、戦争まで使っ
ていた漢字で、軍都の「広島」を
意味し、アジア・太平洋地域へ戦
争のために出ていく中心地だった
のです。「広島」は今の広島で、
これを考える時、かつての「広島」
を抜きに考えることは出来ません。
カタカナの「ヒロシマ」を使う時
は、「平和の合言葉」で、平和を
実現したい時に使うそうです。

今の「広島」から、「広島」の
事実にあぐさ、被爆者への関心、
悲しみや痛みの共感から「ヒロシ
マ」へと平和への思いを広げてい
くことは、平和を築くためにとて
も大切なあゆみだと感じました。

今回の広島巡礼を通して、八月
六日にある「ヒロシマ」の街にい
るということで、「平和」という
原点がそこにはあるように感じま
した。

あの広島暑さの中、日本全国、
そして世界中から多くの人がこの
まちを訪れるのは、まさにヒロシ

マという都市の存在が世界に訴え
かけるメッセージの特異性、重要
性を物語っているからでしょう。
広島が、「平和」とは何なのか、
自分自身の成長と共に変わって
いく「平和」という概念への認識を
確認する場所になっていくだろう
と感じました。

